

## 消費＝浪費に関する理論の歴史（２）

—— 古代ローマのキケロの浪費に関する思想を中心として ——

富貴島 明

### はじめに

紀元前 6 世紀におこった古代ローマは、開放性と質実剛健な気風で、イタリア半島を統一し、紀元前 2 世紀には地中海の覇者となった。多くの属州を支配し、富がローマに流れ込むようになると、ローマ人は急速に奢侈と浪費の生活におぼれていき、衰退の道を歩みだす。歴史上初めての、すさまじい浪費が繰り広げられたのである。キケロは、ちょうどローマ人の生活が、質素から贅沢、儉約から浪費に変わろうとしているときに、儉約や贅沢について、ギリシア哲学やローマの思想を折衷的に統一して論じたのである。だからキケロの思想を学ぶことで、ローマ時代の浪費や贅沢に関する思想が全体的に理解できるのである。

本稿ではまず、ローマの歴史が、ローマ人の浪費的生活にふれながら論じられる。次にキケロの生涯が述べられていく。次稿で彼のストア哲学や浪費に関する思想が述べられる。

### 1. ローマの歴史

ローマはイタリア人の一派のラテン人が、イタリア半島のティベル河畔に建設した王政の小都市国家からおこった。紀元前 509 年には専制的な先住民のエトリア人の王を追放して共和制となった。ローマではすでに、氏族の長である貴族 *patorici* と中小農民の平民 *plebs* に分かれ、初期の共和制は貴族が支配していた。任期 1 年の 2 名の執政官 *consul* が、貴族により支配されていた市民集会で選挙で選ばれ、軍民の最高官となった。その執政官を監督指導する元老院も貴族出身の終身議員で構成されていた。平民は、政治から閉め出されていたが、紀元前 5 世紀の初め頃から、身分的差別の撤廃と経済的地位の向上、借金返済不可能時で、市民の自由を剥奪し、債務奴隷化することの禁止などを求めて闘争をおこなった。この闘争は重装歩兵戦術が普及するとともに平民に有利に展開した。貴族は国防上の必要を考えて譲歩し、紀元前 449 年には、執政官の職務執行に対して拒否権を持つ市民集会 *concilium* 選出の護民官 *tribunus plebis* の職を公にも

うけた。紀元前 449 年には、十二表法も制定され、平民の権利が法律によって守られるようになった。紀元前 367 年には、2 名の執政官のうち 1 人は平民から選ばれること、公有地の独占的利用の禁止（500 ユケラ＝約 125 ヘクタール以上の公有地占有の禁止、公有地への牛と羊の放牧頭数の制限）と高利徴収を制限するリキニウス・セスティウス法が制定された。その数年後には、重要な公職を経験したものは、貴族と平民の区別なく、元老院の議席を獲得する権利を持つことを規定した法律が決められた。新貴族の誕生が続き、貴族と平民の垣根が低くなっていった。紀元前 4 世紀の半ばまでには、元老院は貴族階級の牙城ではなくなっていた。紀元前 287 年には、債務奴隷化の禁止、国家の正式な民会でなかった市民集会の決議が、元老院の承認をえなくても直ちに国法となることが定められたホルテンシウス法が制定された。貴族を含まない市民集会の決定か、貴族を含めた全市民を拘束するようになったのである。これらの新法制定が意味するものは、貴族と平民の単純な妥協ではない。貴族と平民上層部の結託により形成された新貴族が権力を握りだしたのである。つまり、平民のうちの富裕で、有力な者が、執政官になり、1 年の任期終了後は元老院に入って新貴族 *nobiles* となり、政権に参加しだしたのである。あるいは、富裕で有力な平民が、護民官に選出され、市民集会を主宰することで、政権に参加するようになったのである。これによりローマを興隆させるローマ独自の共和制が完成したのである。共和制の組織は以下のとおりであった。毎年選出される執政官 2 人を頂点とする行政機構を、選挙をえない、40 歳以上の終身任期の 300 人のエリート貴族達で構成されている元老院が補佐し、最終決定は市民権所有者全員が投票権を持つ市民集会で決まるシステムである。その市民集会の実権は、紀元前 3 世紀の半ばにはすでに貴族をもふくんだ中産階級に移っていた。紀元前 6 世紀の半ばの王政時代には、10 万アッセの資産以上を持つ第一階級だけの票数 98 票だけで市民集会の総数 193 票の過半数を占めることができた。しかし、第一次ポエニ戦争が終わった紀元前 241 年には、第一階級 88 票（100 人で 1 票）、75,000～100,000 アッセの資産を持つ第二階級 70 票、50,000～75,000 アッセの資産を所有する第三階級 70 票、25,000 から 50,000 アッセの資産を持つ第四階級 70 票、12,500～25,000 アッセの資産を持つ第五階級 70 票、財産なら子供しか持たない無産階級 5 票、総計 373 票である。ローマ社会が確実にそして全体的に豊になり、行政が中産階級化していったのである。だが、行政を実際に担当する人の多くが元老院に議席を持つ人々なので、ローマの政体は寡頭政体と呼ばれている。ギリシア人の歴史家ポリビオス（紀元前 201 年頃～紀元前 120 年）が、ローマの共和制を、執政官にみられる君主政の利点と、元老院に体现される貴族政の利点と、市民集会に象徴される民主政の利点を合わせ持った、理想的な政体であると称賛している。

この理想的な共和制のもと、ローマ人達は、支配の拡大を目指し、近隣諸民族に対する戦争を続けていった。ローマは、強力な重装歩兵戦術でエトリア人やラテン人、ガリア人さらにはギリシア都市とも戦い、紀元前 3 世紀前半には、イタリア半島全域を支配するにいたった。これまで

のローマの外交政策は、征服した地域の市民にローマの公民権を与え、保護する代わりに、ローマ兵として軍隊にも加えていくという、巧妙なものであった。(ギリシア人のプルタルコスは、ローマ興隆の要因を、このような、敗者でさえも自分たちと同化するような生き方に求めた。)ローマの軍事力を支えた、中産身分的性格の農耕市民層である重装歩兵達は、ローマ市民の名誉ある血の税として、また土地獲得欲に燃えて、勇敢に戦ったのである。これによりローマは強力な軍隊を編成し、対外戦争をおこなうことができたのである。ついにローマは地中海に進出し、当時地中海の制海権と商権をにぎっていたフェニキア人の植民地カルタゴとの間で、3回にわたるポエニ戦争(紀元前264年～紀元前146年)を戦った。紀元前202年に、ローマの将軍大スキピオが、カルタゴのハンニバルを破ったザマの戦いで、地中海の覇者が事実上決定した。この頃からローマの高度経済成長が始まり、帝国主義的性格が明確になっていく。(第一次、第二次ポエニ戦争は侵略戦争ではないから、それまでは帝国主義的と断じることは難しい。しかし紀元前200年以降のローマは帝国主義と名付けてもゆるされる。ただし、統一的交渉相手をもつ国に対しては、ローマの覇権のもとでの、独立国どうしとしての共存繁栄を目指す、穏健な帝国主義で臨んだ。ガリアやシチリアのような交渉相手が明確でない国、マケドニアやカルタゴのような条約を守らない国に対しては、属州化という厳格な帝国主義で臨んだ。)紀元前197年にはマケドニアに勝利し、紀元前190年にはシリアをくだし、地中海世界の支配を拡大する。紀元前146年、アカイア同盟がローマに反抗するが、すぐ制圧される。同盟の中心都市コリントは、ローマ軍により徹底的に破壊しつくされ、膨大な財宝、工芸品がローマに運ばれ、住民は奴隷に売られた。同年、第三次ポエニ戦争で、商業貿易で世界に君臨したカルタゴは、破壊、焼き尽くされる。ローマは、この頃から、進出した地方を属州として支配し、激しく搾取し、富を蓄積していく。このようなローマの厳しい帝国主義的支配が始まると同時に、ローマは豊かになり、贅沢と貪欲が支配的となり、社会は墮落していった。度重なる外征の成功が、経済の成長をはやめ、国民を豊かにし、そしてローマを贅沢に染めていくのである。とくに紀元前160年代の小アジアと紀元前146年のギリシアの富の征服は、ローマを決定的に贅沢にさせた<sup>(1)</sup>。

このような発展を続けるローマの社会では、市民の間の階級差が拡大していった。政治と軍事の指揮権を掌握している元老院議員は、農民から土地を買い占めたり、不法手段で取り上げたり、肥沃で広い征服地の割り当てを受けたり、その土地の不法占拠をしたりして、大土地経営を有利におこなった。また自分の所領地では、購入した戦争捕虜などの奴隷による過酷な集団労働をおこなわせ、オリーブや葡萄などの商品作物を生産させていた。また、海外貿易などの商業や土木事業、徴税請負などに従事した一部の平民も富裕になり、紀元前3世紀頃から、騎士の身分が与えられた<sup>(2)</sup>。彼らはローマの商人、資本家、高利貸しとして富を蓄積していったが、その富を土地にも投資して、やはり大所領を経営した。このような大所領を、ラティフンディア

latifundia<sup>(3)</sup>と呼ぶ。

元老議員や騎士階級の富者が大土地所有を拡大する一方で、中小土地所有農民は没落せざるをえなかった。彼らは、市民の義務（現役は17歳から45歳、予備役は60歳までで、抽選で軍務をつとめた）を果たすために歩兵として何年（多いもので一生の内に10回くらい）も従軍しなければならなかった。その間に戦死したり、あるいは生還しても留守中に農地が荒れるなどして、窮乏化していった。また第一次ポエニ戦争が終わってから、初めての属州となったシチリアから直接税として多量の小麦がローマに流入し、さらに他の属州からも二分の一から三分の一の安価な穀物が多量に輸入されて、広い土地さえ持たないローマ中小農民の農業は決定的に圧迫され、いままでの小麦栽培から、ぶどうやオリーブの栽培や牧畜業に変わらざるをえなかった。しかし、ぶどうやオリーブの栽培に必要な先行資本としての莫大な資金を投入して栽培し、さらに、征服のたびに安くなる奴隷を多く使い、広大な土地を有効に使う大土地所有者に対して、家族と数人の奴隷で、さらに資金もほとんどなく、狭い土地しか使えない中小土地所有農民は、生産性の点で負けてしまったのである。（奴隷には兵役義務はないが、市民である農民にはあったから、土地を離れ戦争に行かなければならなかった。）そして借金を重ね、返済ができずに大土地所有者に隷属する者や、農業を捨てる者まで現れた。かれらは富者に土地を売り渡したり、あるいは富者による不法な占有により土地を奪われ、無産市民 *puroretari* になったものも多く輩出した。このようにして、ローマの領土拡大につれて必然的に、大土地所有領が増大し、中小の自営農民層は減少していったのである。

このような農業における構造的変化が、ローマ軍制を、国民軍から私兵傭兵に変えたのである。今までは富裕な中小の自営農民が重装歩兵となっていたが、彼らが零落することにより、自前では軍備を賄えることができなくなってしまった<sup>(4)</sup>。紀元前135年、ローマ史上初めての奴隷の蜂起がおきるが、シチリアに送られた正規軍は、奴隷相手に大いに苦戦するほど弱体化していた。紀元前113年にはケルマン人に大敗している。紀元前111年、アフリカでのユダクタ戦争でも、惨めな敗北を喫した。そこで紀元前107年、執政官マリウスが、軍制改革をおこなった。財産別徴兵制度から志願制度へ改革し、ローマ軍の機能を高めたのである。土地を喪失し、職業軍人としてしか生きられない新軍の兵士は、自分の土地を気にせず戦いに専念し、長期の遠征にも堪えうる優秀な兵士となった。さらに、将軍や幕僚を、市民集会で選出するのではなく、総司令官が直接に任命するように変更した。兵士間の財産的差別がなくなり、最高司令官を頂点とする将官階級と一般兵との関係がより緊密になり、ローマ軍は強力な軍隊としてよみがえったのである。しかし国家への責任感に欠け、司令官の私兵と化す傾向が生まれた。兵士達は、退役後の職を斡旋してくれたり、退職金や失業手当を与えてくれ、さらには征服地から没収地を分与してくれる司令官の命令に従い、元老院や市民集会の命令を無視するようになった。つまり、土地を次々

と合併して大土地所有者となった大金持ちや、外征により収奪した利益により権力を拡大していった有力な将軍達が、兵士を自分の資金で養い、パトローネスとなり、多くのクリエンテスを率い、軍隊を私兵化していったのである。政治も、これら有力者間の支配権争奪戦になった。このような寡頭政治のもと、多くの有権者を自分のクリエンテスにひきこみ、自分の権力を拡大する競争があからさまに行われるようになり、そのために社会が贅沢に犯されていくようになったのである<sup>(5)</sup>。

退役軍人や落ちぶれた農民達などは無産者となり、首都ローマにながれ込んでいった。彼らは市民権は失っておらず、市民集会の投票権を持っていたから、有力政治家達（パトローネス）は自分の支持者（クリエンテス）に取り込もうとして、彼らに穀物を安価に供給する法をつくったり、金品や穀物を与えたり、借金全額無効の法律を作ったり、競技やショーなどを催したりして、大衆の関心をかおうとした。このような、国家や有力者から無産のローマ大衆が受けた様々な援助を「パンとサーカス」と総称する。この頃（紀元前2世紀の中葉）とくに、カルタゴのような大敵がなくなり、軍隊をはじめとしたローマ全体が、規律と警戒を解き、怠惰になり、贅沢と浪費に魅力を感じるようになっていったのである。武力の追求が快樂の追求に道を譲った。質実と剛毅が浪費と脆弱に負けたのである。それも、初めのうちは公共の豪華さや荘厳さに喜びを感じていたが、すぐに個人的贅沢と浪費に快樂を感じるようになっていった。ローマでは、大理石でつくられた神殿、宮殿、凱旋門、競技場、劇場、公共浴場、水道橋などの壮麗な公共施設とともに、貴族や富豪の豪壮な大邸宅が、次々と建てられ、他方では、ローマに流れ込んだ貧民達の安普請の共同住宅が建ち並んでいった。そのためキケロの頃には不動産ブームさえおきた。外征の成功により、ローマに富が集中し、都がさらに華麗に変身してくると、昔日の高潔で、質朴で、困窮に堪え、進取の精神に富んだ確実な気風は姿を消し、人々は、貪欲で、浪費的になり、贅沢と金銭に対する愛が人々の心をしめるようになった。とくに、紀元前2世紀頃に東地中海から、日常必需品でない豪華な商品がローマに流れ込み、市場が活発化し、高度成長の波に乗り豊かになると、贅沢心と金銭愛が高まってきた。金はいくらあっても足りない状態となり、支配階級の子弟の間でも借金はごく普通のこととなっていった。（例えば32歳の頃のカエサルの借金総額は、3,120セルテルティウスであった。）それが原因で政治的腐敗がさらに進んだのである。ポリビウスが指摘するように、敵から襲われず、豊かな生活を習慣的に続けると、身体が怠け、脆弱になるように、国家も、敵がなくなり、豊になりすぎると、習俗的となった贅沢と怠惰が支配し、墮落していくのである<sup>(6)</sup>。

その一つの例が、紀元前63年のカティリナ陰謀事件である。執政官に立候補して落選した貴族出身のカティリナ（紀元前108年頃～紀元前62年）は、キケロによれば、自分の娘を犯したり、弟を殺したばかりでなく、借金をしてまで、費用を惜しまず提供して、多くの青年に宴会や

女道楽をさせるようなたくいこのボスであった。彼は、贅沢で墮落させた仲間達（借財をおった貴族、困窮した元兵士など）と、元老院の焼き討ち、市民の虐殺、水道管の閉鎖や破壊、借金の全額取り消し、要人の暗殺、財産の没収などの国家転覆のクーデタを計画した。しかし実行にかかる直前に、キケロに暴かれ、失敗する。（この陰謀には、次に論ずるクラッスとカエサルも荷担していたといわれている<sup>(7)</sup>。）ローマの歴史家サルティウス（紀元前 86 年～紀元前 34 年）がしているように、カティリナ達の行為それ自身も、当時の贅沢心と金銭欲によって引き起こされた社会の腐敗により生み出されたものである。いったん豊かさの中で贅沢が当たり前となると、儉約は悪徳となり、貧乏が不名誉になってしまう。キケロ自身も認めているように、当時の風潮は浪費と贅沢が支配的であったのである。紀元前 184 年に執政官に選ばれた大カトーは、自分の仕事は、ヒドラのように切っても切ってもでてくる贅沢と軟弱さを根絶することである、といっている<sup>(8)</sup>。贅沢を抑える儉約令は、紀元前 2 世紀からティベリウス帝（在位 14 年～37 年）まで、数回にわたって発令されたのであるが、結局贅沢を止めることはできなかった。

他面、征服地から大量の奴隷が連れてこられた紀元前 2 世紀は、大規模な農業奴隷制の最盛期であった。大規模な奴隷制農場ほど、奴隷に対する搾取も厳しく、奴隷の不満も強かった。その大規模奴隷農業の多かったシチリアや南イタリアなどで、相次いで奴隷反乱がおき、市民を脅かした。市民の間でも貧富の対立が激化し<sup>(9)</sup>、名門出身で元老院の権威を重んじる閥族派（貴族派）と、市民集会に拠る平民派とが対立し、さらに財力を蓄えてきた騎士と呼ばれる人々が政界にも進出してきて、ローマは内乱の状態に入った。ローマ社会のこのような危機的状態を打開しようとしたのが、平民派のグラックス兄弟である。兄ティベリウスは紀元前 133 年、護民官に選出され、農地法を成立させた。公有地の占有を 1 人 500 ユゲラ（約 125 ヘクタール）以下とし、それ以上所有する大土地所有者の土地を没収して貧民に分け、自作農を多数つくり、政治と軍事の担い手を再建しようとしたのである。弟ガイウスは、紀元前 123 年と 122 年護民官に選出され、植民都市の建設にのりだし、失業者を救おうとした。しかし元老院は激しく反対し、兄弟は殺害され、土地の分配は中止された。富者の土地買い占めはさらに進行し、貧富の差は拡大していった。とくにこの頃は、元老院が権力を独占しており、300 名の終身任期の元老院議員は大土地所有者だけで形成されていた。また執政官は、先祖に高位在職者をもつ 20 家族ほどの貴族に独占されていた。（例えばヴァレリウス、クラウディウス、コルネリウスなどの家門ジェンスである。）彼らに対する批判が集中していたのである。紀元前 1 世紀には、ローマ市民と等しい権利を要求する同盟市との戦争や、東地中海の海賊の活動、スパルタクスひきいる剣奴の反乱（紀元前 73 年）などが相次ぎ、ローマの混乱は頂点に達した。これらの混乱に乗じて、私兵化した軍隊を押しやることにより権力者として政界に躍り出てきたのが、ポンペイウスである。さらに、あくどい方法で富を蓄積していったローマ第一の大富豪のクラッス、そのクラッスらから莫大な借金ま

でして平民の人気を取り付けたユリウス・カエサルは、今までの元老院支配の限界を強く感じ、効率的な専制政治の樹立を考えていた。しかし元老院は彼らの活動を抑えようとしたので、紀元前60年3人は密約を結んで、共和制とは相容れない、第一回三頭政治(紀元前60年～紀元前53年)を始めた。やがてポンペイウスが、カエサルから離れ、元老院と結んだため、両者が対立したが、カエサルが勝利して、独裁権力を確立した。

紀元前49年、カエサルは任期10年の独裁官となり、最高司令官と最高神官の地位を占め、実質的な君主のごとき存在とり、効率的にローマの改革に乗り出す。彼は、失業者や退役兵士のために多数の植民地を建設して入植させたり、一般人には安価な穀物を供給したり、剣闘士や野獣のショーを数多く催したり、公共建築も盛んにおこなった<sup>(10)</sup>。贅沢禁止令も制定したが、度を越した贅沢のみ禁止したにすぎない。例えば当時流行していた、一般市民が生け簗で魚を飼うこと、当時高価であった紫紅染めの衣服や真珠の使用を特定の人と年齢と日に限定することなどである。これらの貧民の救済策とともに、中央集権と地方分権をバランスよく行うため属州政治の改革も押し進め、成果をあげていった。また元老院の勢力を拡散し、弱体化するために、定員を300人から900人に増員した。属州に住む、ラテン語も話せないローマ市民や軍団の百人隊長などが、本国生まれの元老議員達と議席を隣り合わせるようになったのである。元老院は独裁者カエサルの政治を単に補佐する機関になった。しかし紀元前44年、カエサルはブルトゥスらの共和政擁護派に暗殺され、ローマは再び乱れた。紀元前43年、第二回三頭政治が、カエサルの養子オクタヴィアヌスとカエサルの部下であったアントニウスとレピドゥスによっておこなわれたが、平和はもたらされず、内乱が再発した。紀元前31年、プトレマイオス朝の女王クレオパトラと結んだアントニウスを、オクタヴィアヌスが、アクティウムの海戦で破る。翌年アントニウスらは自殺して、内乱はようやく収まった。

紀元前27年、オクタヴィアヌスは、元老院からアウグストゥス(尊厳者)という神聖な意味を持つ称号を受け、徐々に、軍事、行政、司法、宗教の全分野において国政を引き受けた。さらに皇帝財務官システムを導入して、属州からの税収を公正かつ自分の意図のもとには配分するほどの権力を独占した。相続税を新設して、退職軍人に退職金を支給する金庫を創設したり、ローマ史上初の常備軍という能率的軍事組織を創設して、軍隊に対して有効な統制をするメカニズムを確立した。ここにおいて共和制は完全に終わり、帝政が始まるが、彼は共和制の形式を尊重し、プリンケプス(第一の市民)として政治を行った。彼はローマ市の美化に努め、カエサルのフォルム、アウグストゥスのフォルム、フラミア街道の全線改修などの公共建設を中心とする都市整備を大規模に行い、ローマを美しい大理石の街に変身させた。本国イタリア内に28の植民都市、さらにイタリア外に37の植民都市を建設し、国防と、軍備縮小(50万の兵士を25個軍団15万人にまで削減)により退役した兵士に職を与えるという有効需要政策により、ローマは豊

になっていった。また、市民に金品（紀元前 24 年の凱旋式のときには戸主一人につき 400 セステルティウスを配った）や穀物を与え、豪華な娯楽を催して市民の人気をえることも怠らなかった。帝政期にはローマの市民達はますます「パンとサーカス」に気をかけるようになっていった。

最後の贅沢禁止令を出したティベリウス帝は、ローマ市民が、怠惰や贅沢などの悪弊に犯され揺らいでいるときに、その矯正の役を買ってでた<sup>(11)</sup>。彼は、舞台芸人の給料を減額し、剣闘士の出場回数を減らし、費用を切りつめた。家具調度品や食糧の売値を調整し、高すぎないようにした。自分の正式の晩餐会に、前日の食べ残しの料理を並べ、半分食べていた野猪も、まるまる一頭の時となにもかも同じだと請け合って出した。壮大な建物は建てなかった。見世物も一切提供しなかった。倹約を奨励する一方で、道徳も矯正しようとした。貞節を売る者、不義をはたらく者、邪教にとりつかれた者、無頼漢や無軌道な暴徒は、懲らしめ、追放した。公的な大盤振る舞いは 2 回だけした。金融がひどく逼迫し、民衆が強く要請したので、1 億セステルティウスの資金を 3 年間、無利子で貸し出したことと、とげとげとした空気を和らげるために、カエリウスの丘の火災で焼失した共同住宅の所有者に再建費を弁償したことである。彼は、27 年、大衆に恨まれながら 78 歳で病気で死ぬ。

ティベリウス帝が残した遺産は、カリグラ帝により浪費されてしまった。カリグラ帝（在位 37 年～41 年）は人気取りのために、ローマ市民に 300 セステルティウスずつの祝儀を配ったり、豪華な晩餐会を提供したりした。非常に高価な真珠を酢に溶かして飲んだり、黄金製のパンとおかずを会食者に供したりもした。公会堂の上から、相当額の金貨を数日間にわたってばらまくことまでした。豪華な見世物もたびたび催したが、前代未聞の見世物も考案した。バイアエ湾とプテオリの防波堤の間、約 3.6 マイルの間に、世界中から徴収した貨物船を 2 列に並べて錨で止め、舟の上に土を盛り街道そっくりに整えた。その上を、最初の日には正装して馬に乗り、次の日は 2 頭立ての馬にひかせた戦車に乗り往復した。10 段権の快速船を建造し、船尾に宝石をちりはめ、様々の色彩の帆をたて、広々とした贅沢な浴槽と柱廊と食堂を設け、更にその船のうえにたくさんのぶどうや果樹を植えた。予算を無視した別荘や屋敷、神殿や城壁などの建造物も建てた。さらに妹たちとの不倫な関係と売春婦ピュラリスとの悪名高い情交は別として、カリグラ帝が手控えた上流の貴婦人はほとんど一人もいなかった、といわれている。このような放蕩の結果、ティベリウスの残した 27 億セステルティウス帝の遺産を 1 年もたない内に使い果たしてしまった。そして、さらに放蕩を続けるために、市民から略奪したり、重税をかけたり、さらには、売春窟を設け、良家の婦女子や青年をたたせておき、名告げ奴隷を広場に送って、若者や老人の色情をそそのかさせた。やってきた者には利子の付く金を貸し与えられさえた。このようにして強奪した金貨を山と積み、広々とした場所にばらまき、その上を裸足で散歩したり、全身で転げ回ったりした。残酷な処刑も好んだ。41 年 29 歳で暗殺される。



放埒、淫欲、貪婪、残虐において、ネロ帝（帝在位 54 年～68 年）はカリグラ帝を上回っていた。支出を几帳面に計算する者は下卑た守銭奴で、無駄金を蕩尽する者はきわめて洗練された潔い者だといって、叔父のカリグラ帝を誉め讃え、驚嘆している。浪費の限りを尽くした。真昼から始めた食事を、夜まで延々と続け、その間にたびたび温水プールに入り、夏には雪で冷やしたプールで、心身を爽快にした。公の晩餐会で淫売婦や芸妓に給仕させた。舟で航行するごとに、海岸や川辺に沿って料亭を設けさせ、ネロに岸に上がれと誘いをかけさせ、その卑わいさを楽しんだ。友人に一夜の宴会を強要し、400 万セステルティウス以上の費用をかけさせた。どんな衣装も二度とは着なかった。魚釣りには金の網を使った。旅行するときは、旅行四輪車 1000 両以上を連ねた。彼のらばには銀の蹄鉄がつけられていた。広壮華麗な黄金の館は贅を極めたものであった。庭池は海のようにあり、その周囲を建物が取り囲み、まるで都市の外観を呈していた。館内の大部分の部屋は、すべて宝石と真珠を鏤めていた。食堂は、天井に象牙の鏡板がはめ込まれ、花や香水が客の上にもまき散らされた。食堂の貴賓室は、球場で、天体のごとく常に自転していた。浴槽には海水と硫黄泉がひいてあった。さらに温泉の水泳プールまで造営しようとした。自分の純潔を公衆の面前でどん底まで落とすことまでした。親や市民を虐殺し、ローマを焼き尽くさせもした。市民を搾取することで、贅沢三昧と自堕落な生活を続けていったのである。しかし皆に背かれ、68 年 32 歳で自決した。80 年には、ティトゥス帝（在位 79 年～81 年）により、5 万人収容のコロセウムが完成する。ネロが自分だけの贅沢として建てようとした黄金の館の庭園内につくられた大円形競技場が、ローマ市民全体の娯楽施設になったのである。そこでは、あらゆる種類の野獣を 5000 頭も出場させ、豪勢な拳闘士の試合をおこない、2 頭立て、4 頭立ての戦車の競争や正規の軍艦を用いた模擬海戦までおこなわれた。2 世紀後半になると、これらの見せ物が、軍事と関連した祝祭日以外にも催され、年間 135 日を数えるようになった。ドミティアヌス帝（在位 81 年～91 年）は、大仕掛けで豪勢な見世物を、大演劇場ばかりでなく、大競走場でも催した。野獣狩りや剣闘士試合は、夜間にもたいまつ灯りのしたで行われ、男同士ばかりでなく女同士の対決もみられた。世紀祭の祝いの時の競走では、普通 1 日最高 24 レースのところを 100 回の発走をさせた。毎年のミネルヴァ女神に捧げる五日祭では、雄弁と詩の競技のほかにもえり抜き野獣狩りや舞台劇も催した。いろいろな祭りの最中には、祝儀やあらゆる種類の土産、山海の珍味を持ったパンやかご弁当を市民に与えたりした。強力な外敵が存在しないローマは、皇帝を初めとして市民全体が弛緩し、贅沢と怠惰におぼれていったのである。以後いわゆる五賢帝（96 年～180 年）の末期にいたるまで帝政は平和を享受し、その繁栄は頂点に達した。（以後 200 年にわたって、いわゆるローマの平和が続く。）この間トラヤヌス帝（在位 98 年～117 年）の時、ローマの領土は、北はブリタニアから南はサハラ砂漠北端、東はメソポタミアから西は大西洋岸の三大陸まで拡大し、最大の領土を持つことになった。総人口は 5000 万人から 6000

万人、首都ローマだけで100万から120万人であったと推察されている。帝国全体に経済活動が盛んで、ことに属州の農業生産や手工業が活発になり、それらがローマに輸入されるようになった。アラビア、インド、中国、東南アジアとの貿易もおこなわれ、東方の貴金属、香辛料、絹、珍味、珍しい野獣などがもたらされた。属州には無数の、ローマ風の都市が繁栄し、また新たに建設された。豊かになった市民達は私財を投じて自分たちの都市を美化することにつとめた。贅沢も極点に達した。

140年頃、法律家で風刺作家のユウェナーリスが死去する。彼は、貪欲と貧困と支配階級の奢侈の批判で有名であるので、ここで触れておこう<sup>(12)</sup>。彼の風刺が余りにも辛辣なので、ドミティアヌス帝に嫌われ、追放されたといわれている。詩の内容は次のように辛辣である。ローマでは、娘に淫売をさせたり、新妻を贈り物にしたり、金持ちの未亡人の陰門で遺産を手に入れるような倒錯した性によって、また賄賂、買収、博打などの不正な手段で財産を手に入れた者たちが、贅沢と浪費に狂奔している。すべての悪徳がその極みに達している。不正によって築かれた富がすべての者の上に君臨している。お世辞と追従のうまい人が金持ちに取り入り、うまい汁を吸い、追従を潔しとしない人を見下す。人が財産により評価され、信用される。法廷で最初に尋問されるのは、現金の額、奴隷の数(最低で2人、信用できる弁護士は8人以上)、土地の面積、デザート皿の数と大きさである。人柄は最後にしか聞かれない。貧乏人は貧乏人のままで、金持ちは、不正な手段で富を増加していき、貧乏人を見下す。

この頃の貧乏人の数を推計した資料がある<sup>(13)</sup>。ローマ市の総人口を120万人とすると、どんなに少なく見積もっても総人口の三分の一から半分は、国費による無料穀物を受給されることによるのみ生活できた困窮者であった。経済的自立者は10万から30万人にすぎない。(他は、親衛隊、首都駐屯兵、外人、奴隷である。)目も眩むような豪華な生活をしている億万長者は、多く見積もっても2000人から3000人をでないであろう。(昭和38年に吉村忠典氏が計算するところでは、1セステルティウス33円である。)経済的に自立のできる2万セステルティウスの金利を生むためには、金利5%として40万セステルティウスの財産を運用していなければならない。40万セステルティウスの財産とは、当時富裕な中流階級と考えられていた騎士身分(第二階級)の最低法定財産額である。とするとこの2万セステルティウスさえ稼げない経済自立者が人口のほとんどであったことになる。大金持ちの主要部分は、100万セステルティウス以上の財産を所有するものと定められていた、600人の元老議員と、騎士にのみ開かれた高級官職に登用され、権勢と富を得た騎士階級の上層部だけである。元老議員が任命される官職は、騎士の官職より高額の年俸であった。アジア属州の総督の年俸は100万セステルティウスであった。彼らは富と官位を独占し、両身分(ウテルクエ・オールドー)と呼ばれており、さらにこの両身分に、兵士、退役兵、地方都市の有力者を加えた人々は、特権上層民(ホスティオーレス)と呼ばれており、刑

法的な取り扱いなどの点で一般庶民とは区別されて、特権を与えられていた。

当時の金持ちの財産規模をみてみよう。ローマの政治家であり文人でもあった小プリニウス(61年～114年)を例に取ってみる。彼の所領に投資されている額は、最低に見積もっても1,200万から1,500万セステルティウス、その所領地からの年収は80万から100万セステルティウス、ほかにも統領、ビテュニア総督などの高級官僚を歴任しているので、年俸の額も多い。500人以上の奴隷も所有していた。合わせると、彼の財産額は、2,000万セステルティウスぐらいであろうと推測されている。それでも彼は、自分を金持ちだと考えていなかった。また解放奴隷のトリマルキオは、無一文から身を起こし、贅沢な暮らしの末、3,000万セステルティウスを残したといわれている。皇帝の財産ともなるとかけ離れて多い。皇帝は、エジプト全土を私有地として支配した。さらに各地の農地、鉱山、工場などを皇帝領として所有していた。奴隷の数は、ゆうに2万人を越えていたろう。死刑や追放刑を受けた者の財産を没収し、自分の財産に加える権利を所有していた。カリグラ帝以後は、遺産の一部を皇帝に遺贈しなければならなかった。(オクタヴィアヌス帝の場合、最後の20年間に受け取った遺産総額だけで140億セステルティウスといわれる。)戦利品の大部分は皇帝のものになった。皇帝が自弁することになっていた兵士や官吏の俸給や食費などの支出も膨大であったが、国の会計と皇帝個人の会計の区分が曖昧であったので、流用は頻繁に行われていた。このような皇帝をはじめとした元老議員などの少数の富者が、ぎりぎりの最低生活をしている多数の民衆の面前で、見せびらかすような浪費を繰り広げていたのである。

とくに、夜の宴会は、無駄と贅沢と華美、空虚な快樂と錯綜した欲望、病的なまでの嗜好と趣味の繊細化が、集中的にあらわれたひとつの象徴である。宴会は、金持ちや金持ちぶった人たちが見栄を争い、富を見せびらかす格好の場であった。

王侯的奢侈の例として次のものがある<sup>(14)</sup>。雌の子豚の乳房の肉、遠い海でとれた、大きな鱈は珍味とされていた。孔雀は外見が美しいので、贅沢な料理であった。ポニコプテルス(フラミンゴ)の舌、草の多い巣地を好み、植物のみを食い、反芻をおこなう唯一の魚類であるという細身のスカルスという魚の内臓、ヒラメの一種といわれるロンブスという魚、蝶鮫の一種といわれるアキペンセルなどは、遠方でとれるという稀少性のみにより、珍重されていた。牡蠣や雲丹も珍重された。牡蠣は、キルケーイーとか、ブリタニアの海岸、バイアイのルクリヌス湖のものが、雲丹は、ミーセームヌのものがとくに有名であった。ポーレートゥスと呼ばれるキノコも高価な食材であった。それらは、単に奢侈により食欲を新たにするためだけに食され、その宴会を有名にしたものである。ウィテリウス(在位69年)はあくことを知らぬ、さもしい食い意地の張った皇帝として有名であった。日に四度にわたる酒盛りと食事を難なくこなした。同じ日に、それぞれ違った人から別々の宴会に招待させ、それぞれの費用が40万セステルティウス以上であっ

た。入念に吟味された2,000匹の魚、7,000羽の鳥が食卓に供されたこともあった。桁外れの大量には、快速船で送られてきたへらの肝臓、雉と孔雀の脳味噌、フラミンゴの舌、やつめウナギの白子が盛りつけられていた。

宴会は、普通は、前菜、メイン料理、デザートで3コースからなっていたが、時には7コースまでの贅沢があった。満腹しても、鳥の羽で喉をくすぐったり、吐瀉剤を使い、吐いてから、また食べた。世界中から集められた高価な料理を、食べるために吐き、吐くために食べたのである。酒をつぐ奴隷、踊るような華麗な身振りで料理を切り分ける奴隷、吐いたものをふき取る奴隷、うちわを使う奴隷、蠅を追う奴隷、あんまをする奴隷、小便を手伝う奴隷などが、臥台に横たわる出席者にサービスをしていた。出席者も、見栄から上等で派手な食事服を着てきた。ゾーイルスのように、食事服を11回も変えることもあった。

キケロの時代の後、つまり出版体制の確立とその弊害がでるようになってから朗読が流行しだし、宴会の席で聞きたくないような朗読がなされ、「朗読が人を殺す」という状態になることもあった。ローマは、このように習俗化していった贅沢ゆえに墮落、頹廢していったのである<sup>14)</sup>。

さらに五賢帝最後のマルクス・アウレリウス・アントニヌス帝(在位161年～180年)の治世の末頃からゲルマン民族の侵入、東方からの疫病、帝政財政の窮乏化などにより政治が乱れ、彼の死後には皇帝位をめぐる争いが激化した。216年、カラカラ帝(在位211年～217年)が、総面積11万平方メートルの広大な敷地に、2万5000平方メートルの大浴場を建設する。周辺には運動場や庭園、図書館も設けられた、市民が安い料金で利用できる総合娯楽施設である。このような大衆へ贅沢を植え付けるような人気取り政策にもかかわらず、政治は安定しなかった。3世紀には、各地の軍隊が勝手に皇帝をたてて争う軍人皇帝の時代(235年～284年)という内乱の時代となった。3世紀の末にディオクレティアヌス帝(在位284年～305年)が混乱を平定し、オリент風の専制政治を行い、市民は皇帝の臣民となった。彼は広大な帝国支配を効率よくするために、2人の正帝と2人の副帝を置く、四分統治制を採用したが、成功しなかった。313年、コンスタンティヌス1世(在位324年～337年)は、帝国統一のために、ついにキリスト教を公認した。330年彼は、荒廃したローマを捨て、新しい首都をコンスタンティノープルに移した。彼のもとで官僚制が発展し、国民の職業は固定化され、ローマ帝国は、階級社会となり、市民の自由は失われていった。

4世紀後半には、ササン朝ペルシャの侵入を受け、北方と西方にはゲルマン民族大移動が生じ、ローマ帝国はそれらを防げなかった。長い国境を守るには多くの軍隊を維持する必要があったが、その軍隊はゲルマン人などの異民族の傭兵が採用されていた。これらの傭兵達が、反対に反乱を起こしたり、反乱に荷担することもしばしばあった。これら多数の軍隊を維持する費用と、自己増殖する官僚制度を維持するために増えつつける役人の費用をえるために、さらに皇帝自身の

放蕩と贅沢をおこない、ときに民衆の贅沢としての「パンとサーカス」を行う費用をえるために、貨幣改悪が頻繁におこなわれ、都市に重税が課せられ、関税率が引き上げられていった。さらに、鉱山開発などの産業が皇帝の独占となった。その結果、悪性インフレが蔓延し、都市は荒廃し、自由な経済活動が妨げられていった。さらにこれらの内乱と異民族の侵入は、交通網の安全性を奪い、商業と貿易の水準を低下させた。ローマ帝国全体の経済は衰えていった。農業にも大きな変化が生じていた。奴隷供給源が枯渇しだすと、奴隷制経営が非能率的であることが認識された。その代わりに自由な小作人 *colonus* が地代を支払って自給自作する小作制が普及しだした<sup>(16)</sup>。大土地所有者の帝国支配権からの独立がおきてきたのである。このような、自営農民や手工業経営者の没落は、忠誠心を持ったローマ兵の減少となった。公共投資も、贅沢に慣れた大衆の人気取りのために、劇場や教会の建設のような非生産的部門に向けられ、生産力の回復にはつながらなかった。ローマ帝国は、政治的にも、経済的にも、自己崩壊をしたのである。

395年、テオドシウス帝（在位379年～395年）は、帝国を東西に分割して2子に分け与えた。476年、ロムルス・アウグストゥス（在位475年～476年）のとき西ローマは、ゲルマン人傭兵により滅亡された。ゲルマン人の侵入が比較的少なくすんだ東ローマ帝国は、1453年まで専制的国家体制を維持していった。

- (1) cf. Christopher J. Berry, *the Idea of Luxury*, Cambridge University Press, 1994, pp.68-69. 紀元前168年、パウルスがマケドニアの最後の王ペルセウスを破り、彼らの富をすべて獲得することにより、財産税を課す必要がないほど、国庫が豊かになった。大スキピオはじめローマの指導層のギリシアかぶれを、大カトーが激しく攻撃したほどである。参照、キケロ、角男一郎訳、義務について、135頁。（すでに紀元前211年、大ギリシアの中心地であったシラクサからのギリシア美術品や工芸品の略奪により飾り立てられたマルケルスの凱旋式で、ローマの庶民までギリシア造形文化のすばらしさを確かめることができた。）
- (2) 騎士階級 *ecuitas* とは、ローマ軍に騎士を提供する義務を負う第一階級に属するほどの資産家という階級である。（馬を飼い、鎧のない馬を乗り回すにはそれだけの資産が必要であった。）国政を担当する貴族階級や元老院階級と区別されて、騎士階級と呼ばれている。騎士階級の主たる仕事は、租税徴収の請負業であった。請負の権利を落札すると、徴収した額の10%の手数料が入った。その上、租税を払う人々は借金をする人が多いので、金貸し業も兼業していた。利率は決められていない。（良心的業者では12%であった。カエサルを暗殺したブルートゥスが、48%もの高利をとっていて、キケロにあきれられたという話があるほどである。カエサルは年率12%を上限として、次第に6%まで落とそうと考えていた。）ほかにも軍備に必要な物資の納入や公共事業も請負った。うまみのある仕事で巨利をえると、それを土地に投資した。
- (3) *latifundium* とは、*latus* 広いと *fundasus* 土地との合成語で、普通の農民が耕作して一家を扶養する土地よりも広い土地を意味する。奴隷労働によるぶどう園やオリーブ園、広大な放牧地、あるいは小作人に貸与されて経営されている大所領を意味した。太田秀通、古典古代社会の基本構造と奴隷制、岩波講座、世界歴史3、古代2、452頁、461頁～468頁。
- (4) 重装歩兵には、17歳から45歳までの、第一階級、第二階級、第三階級出身の全員が入り、ときに

第四階級に属するものが組み込まれた。ローマ市民の上流と中流の階級出身者でしめられており、それがローマ軍の強さの原因であった。装備は、紀元前3世紀には、軍装の統一の必要から国家の支給とされたか、給与から差し引かれた。日給か支払われていた。歩兵1日4アッセ、百人隊長8アッセ、騎兵12アッセである。奴隷でも気の利いたものなら、1日に12アッセ稼げる時代であったから、ほぼ無給に等しい。装備の内容は次のとおりである。剣は細身の長いものを使っていたが、大スキピオの後には両刃の短剣に変わった。投げやりは、長さ3メートル、重さ1キロ以上の細身と太身の2本を携えた。盾は、2枚の板を張り合わせ、外側を厚い皮で覆い、外周部分を鉄で補強した、1.25メートルの楕円形のものである。かぶとは、鉄か銅製で、上に羽根飾りがつけられていた。すね当てと背中まで覆う胸当ては、鉄の帷子かぶあついで作られていた。それにサンタル式の軍靴である。参照、塩野七三、ローマ人の物語、第2巻、83頁～97頁。

- (5) プラトンも言っているように、寡頭政治になると、多くのクリエントスを満足させ、つなぎ止めておくために、贅沢な催し物をしたり、宴会を開いたりして、社会全体か贅沢に犯されていくのである。参照、田中美知太郎訳、国家、世界の名著7、308頁～309頁。cf Christopher J Berry, *op cit.*, p.70.
- (6) cf. *ibid.* pp.67-71. ローマの詩人のジュネーヴァルは、次のような詩をうたっている。  
 今や、長き平和のもたらす罪悪はすべて我らのもの、  
 それは、敵の恐るべき力よりさらに恐ろしいもの、贅沢である。  
 その破壊的影響は至る所にあらわれる。  
 そして贅沢に慣れしたしんだ人々に、厳しい仕返しをする。
- (7) 参照、ストニウス、国原吉之助訳、ローマ皇帝伝、上、18頁。
- (8) cf. Christopher J. Berry, *op cit.*, p.75.
- (9) 繰り返すことになるか、紀元前6世紀半の階級とそれぞれの市民集会での票数は次のとおりである。第一階級は、資産100,000アッセ以上の人々が属し、票数は98票であった。第二階級は、75,000から100,000アッセで、20票であった。第三階級は、50,000から75,000アッセで、20票であった。第四階級は、25,000アッセから50,000アッセで、20票であった。第五階級は、12,500アッセから25,000アッセで、30票であった。財産ならば子供しか持たない無産階級は5票であった。総数193票の過半数を第一階級だけでしめられた。しかし、第一次ポエニ戦争後の紀元前241年におこなわれた大改革により、それぞれの階級の資産は変化しなかったか、票数が激変した。第一階級は88票、第二階級から第五階級までそれぞれは70票、無産階級5票を持った。総数373票の過半数を占めるには第一階級、第二階級、第三階級まで動員しないとしめられなくなった。300年の間に、より広範な市民の意志が国政に反映するようになったことを示すとともに、中産階級が増大するという社会の健全な富裕化が進行してきたことをも示している。だか次の100年間にローマ社会での貧富の差は拡大する。今までは資産格差は10倍以上にすぎなかったか、第三次ポエニ戦争後の紀元前146年では、第一階級は1,000,000アッセ以上の資産かある者であり、第二階級は1,000,000アッセから300,000アッセであり、第三階級は300,000アッセから100,000アッセであり、第四階級は100,000アッセから50,000アッセであり、第五階級は50,000から6,400アッセであり（まもなく4,500以下になり、紀元前130年には1,500アッセにまで落とされた。）、無産階級は第五階級の資産未満の資産しか持たない者であったから、資産格差は今までの10倍から500倍以上になった。確実に貧富の差か拡大したのである。参照、塩野七生、ローマ人の物語、第2巻80頁～82頁、第3巻32頁。
- (10) カエサル以前に建設されたローマの植民地は、パルス、ナルホンスなど8都市。カエサルか建設した植民地は、カルタコ、コリント、マケドニアなど48都市。カエサル以後カエサルの計画を踏まえて、第二次三頭政治か建設した植民地は、18都市である。植民地建設に伴う経済的波及効果は、ローマを確実に豊かにしていった。参照、塩野七生、ローマ人の物語、第5巻、303頁。高橋秀、地中海

世界のローマ化, 岩波講座, 世界歴史 3, 古代 2, 415 頁～450 頁。

- (11) ローマ皇帝の自伝は, ストニウス, 国原吉之助訳, ローマ皇帝伝, 上, 下を参照した。
- (12) 参照, ユウェナーリス, 国原吉之助訳, 風刺詩集, 世界名詩集大成 1, 古代・中世, 206 頁～212 頁。弓削達, 素顔のローマ人, 生活の世界歴史 4, 92 頁～98 頁。
- (13) 参照, 弓削達, 素顔のローマ人, 98 頁～109 頁。
- (14) 参照, 弓削達, 素顔のローマ人, 110 頁～125 頁。プルタルコス, 柳沼重剛編訳, 食卓歎集。アテナイオス, 柳沼重剛編訳, 食卓の賢人たち。アピキウス, 千石玲子訳, 古代ローマの調理ノート。
- (15) 参照, モンテスキュー, 田中治男, 栗田信子訳, ローマ人盛衰原因論, 108 頁。
- (16) 弓削達, ドミナートゥスの成立, 岩波講座, 世界歴史 3, 古代 3, 33 頁～43 頁。

## 2. キケロの生涯

マルクス・トゥッリウス・キケロ Marucus Tullius Cicero は, 紀元前 106 年 1 月 3 日に, 騎士階級に属する同名の父とその妻ヘルウィア Helvia との長子として, ローマの南約 100 キロの古市アルピヌム Arpinum で生まれた<sup>(1)</sup>。乳母は幻を見て, 自分の養う子が今にローマ人の大きな幸せになると予言したという。トゥッリウス一門に属するキケロ家のマルクスとなる。彼の家系は明らかでない。トールスキー族の間で名声を上げ, 有力ローマ人と戦争をした王のトゥルス・アッティウスに遡る家系だという人もいるし, 父親は, フェルト工場で生まれ育ったともいわれている。ラテン語で ciceru とは豆の一種を指し, キケロ家の先祖が, 豆の栽培をしていたからとか, 先祖の鼻の先に豆のくぼみのような浅い溝があったから, そのあだ名が付いたとかいわれている。貴族と平民との反目抗争が激化している当時では, 世に出る最良の道は雄弁術にあった。子供の頃から, 優秀な天分を示し, 紀元前 97 年, 9 歳の時, ローマに遊学した。紀元前 89 年 17 歳の時, 兵役の義務に従い, スッラのもとで 1 年間軍務につき, マルシー戦争に参加した。以後 10 数年間, 一流の人士について各種の勉強に精励する。雄弁術, 修辞学, 法学, 詩作を勉強するかたわら, エピクロス学派のピロンやストア哲学のディオドトスなどから教えを受けた。紀元前 80 年, 当時権勢を極めていた独裁官スッラの寵臣によって親殺しの罪で起訴されたロスキウスを, あえて弁護し, その訴訟に勝つことにより, 無実の罪から救った。キケロは, その勇気と演説の巧妙さで, 名声を得たのである。紀元前 79 年, 富裕な良家の娘テレティアと結婚する。紀元前 79 年から紀元前 77 年までギリシアと小アジアに遊学し, ゼノンやポセイドニオスらから哲学の指導を受けた。紀元前 77 年, 帰国して, さらに弁論術の練習にも明け暮れ, ロースキウスなどの役者たちからも熱心に教えを受けた。やがて弁護を引き受けるようになると, 一躍ローマにおける三大弁護士の一人に数えられるようになった。キケロに 2,000 セステルティウスという高額な弁護料を払うのは, 彼の雄弁より, 彼のステータス・シンボルに対してである<sup>(2)</sup>, と言

われているように、彼は有名弁護士としての贅沢な生活をしていた。彼は信用のために、大きな指輪を輝かし、8人の奴隷と10人の供廻りを持ち、自分の後ろに担ぎ椅子を置き、前には徒歩のトガ着用者（ローマ市民）を連れていた。彼は、友人達から借金までして、ローマの最高的高级住宅街であるパラティーノの丘の上の、ローマ第一の金持ちであるクラッスの豪邸を、350万セステルティウスで譲り受けた。この本宅のほかに、温泉地や海岸や涼しい山間の地に合計8つの別荘を所有していた。彼は多少財産があったために、訴訟依頼人から、弁護による報酬や贈り物を受け取らないことで有名であった。たとえ贈り物をされても、人々のために消費したといわれている。だが、富者や権力者から巨額の遺産や贈り物を贈られることもあった。妻の持参金（12万テナーリウス）や彼女の相続した遺産（9万デナーリウス）もあった。しかし、役職を利用して不正に財力を蓄え、政界の実力者となっていったのではなく、あくまで弁論と業績だけで政界を登りつめていくのである。紀元前75年、財務官に選出され、総督代理としてシチリア島に赴任する。キケロの配慮と正義感と穏和に満ちた善政を、この島の住民は後まで忘れず、大いなる尊敬をキケロに送った、といわれている。紀元前70年、シチリア総督の地位を利用して汚職をしていたガイウス・ウェッレスを弾劾する。当時最高の弁護士といわれていたクイントゥス・ホルテンシウスらに向こうにまわして、36歳のキケロは告訴したシチリアの属州民のために弁論し、成功する。この年に陪審員制度が改定され、陪審員の構成員が、元老院独占から、元老院議員、騎士階級、平民にそれぞれ三分の一ずつの配分になっていたのが、キケロ側に有利に働いたのである。彼の見事な弁論は、彼の友人であるアッティクス（金融業や出版業もかねた経済人であるティトゥス・ポンポニウス）により刊行された。この法廷弁論の成功で、キケロは第一位の弁論家と見なされるようになる。門閥貴族でもなく、先祖に執政官を出してもいない新参者であるキケロに、政界への道が開かれた。紀元前69年、按察官エディリスに選出される。按察官とは、貴族2人平民2人からなり、任期1年で、ローマ市の道路、交通、祭式、水道、度量衡を管理し、市場の公平さを守らせる役目であり、さらに、穀物の分配、公共競技の監督、公安警察関係なども任務であった。彼は、豪奢な催しをすることと過度な節約をすることの両極端を避けて、民衆のために節度のある施しをした。権威は低く、多忙で報われることが少ない役職であるが、民衆に直接関係する分野を担当するわけだから、人気取りには適当な官職であった。キケロも民衆の心を掴むことに成功した。キケロのパラティウムの本宅に敬意を表しに来る人は、富限者のクラッス、軍事的権勢者のポンペイウスにも劣らなかったといわれている。紀元前66年法務官に主席として選出され、潔白かつ公正に裁判を行った。官吏としての才幹と政治家としての能力を示したのである。キケロの名声と勢力はさらに大きくなっていった。紀元前63年、ガイウス・アントニウスとともに執政官に選出される。彼は政治的には、平民派を地盤とするポンペイウスを支持していたが、執政官になると、平民派に対しても平民に対しても少しの好



意も同情も示さず、旧友さえ裏切って元老院の門閥派に入ってしまった。同年、彼はカティリナ陰謀事件を解決する。キケロは、徒党を組んで、要人の暗殺と国家転覆の陰謀を企てたカティリナの一味を、寸前のところで捕らえると、元老院最終勅告を発令し、慣例に反して裁判もかけずに処刑した。門閥派の元老院議員達はキケロを「祖国の父」と賞賛したが、カエサルのような平民派の人々からは、温かい目では見られなかった。紀元前60年、カエサルとクラッススとポンペイウスの第一次三頭政治が成立し、協力を求められたが、権力政治は自分の心情に反するとして拒絶する。キケロの弟のクインティウスは、カエサルの幕僚の一人として、ガリア戦役で軍団長をつとめた。紀元前58年、護民官のクロディスは、かつて流神罪で訴えられた裁判で不利な証言をしたキケロに復讐するために、カティリナー一味に対して裁判なしに処刑したキケロの処置が不法であるという法律を可決させ、キケロを追放においやる。このときの追放中に彼は、ポンペイウスやカエサルなどあてにおびたしい数の手紙を送っている。そのすべてが、追放のみを嘆き、早くローマに帰れるようにとりはかってくれという内容であった<sup>(3)</sup>。この時期の手紙から「泣き虫キケロ」のあだ名がつけられた。紀元前57年、キケロに好意的な執政官レントゥルス・スピンテが、キケロの追放解除令を市民集会で可決させる。帰国したキケロは、凱旋將軍のようにローマ市民に歓迎される。追放中に没収された資産は戻され、破壊された本宅や別荘は国費で建て直された。ふたたび首都ローマの最有力者の地位に返り咲く。すぐさま、カエサルの力を弱めるために、ポンペイウスを元老院側に引き込む運動を始める。しかし、キケロもカエサルも、貧富の差が拡大し、富める者が土地を拡大していき、そして貧乏人の前で金持ち達が贅沢な生活を繰り広げるローマの現状、さらに門閥や賄賂で左右される政治や公事の現状を憂う思いは同じように強かった。そして両者とも、ローマ改造の方策として、スッラののような、4,700人もの反対派の一掃による元老院体制の強化による、たがのゆるんだ共和制の復活は考えもしなかった。キケロは、言論の力により、元老院を初めとしたすべての公人の徳の力を向上させ、公生活を浄化させて、その有徳な少数の元老院議員の支配による共和制の復活を願ったのである。その熱い思いの実現のための演説であり、著作であった。反対にカエサルは、このように拡大した広大なローマ領土の機能的・効率的統治は、墮落した元老院議員による共和制では不可能で、有能な独裁官のみ行えろと考えていた。たがのゆるみきった共和制＝寡頭政治でなく、効率的な独裁制のみが、ローマを救えると考えた。その熱き思いの実現のための軍事力の確立であった。両者ともおたがいの熱き思いを評価はしていたが、改革の方向は正反対であった。(しかし両者とも文筆の才能、教養を認めあい、議論を交わしたり、書物を送り評価を確認したりしていた。)紀元前53年、平民集会や議会の開催と解散の権限を持ち、形式上は最大最高の権限を持つと、キケロ自身自慢しているト占官に任じられる<sup>(4)</sup>。紀元前52年、『法律について』を書き始める。紀元前51年、『国家論』を完成させる。ローマの理想的法律と国家の形態は、元老院の有徳な少数貴族

による共和制であるというキケロの持論が述べられている。同年、統治の州を決定する籤で決められた小アジアの属領キリキアの総督を務める。そこでは、贈り物は受け取らず、着服された公金を戻したり、かれの施政は恩情と正義感に溢れていた。また山賊を打ち破り、兵士からインペラートルの称号を捧げられ、有頂天になる。紀元前49年、カエサル(民衆派)とポンペイウス(元老院派)との内戦が始まると、ポンペイウスの軍に付き添い、ギリシアまで逃げる。紀元前47年、勝者として帰還したカエサルは、キケロの才能を高く評価していたので、キケロは友人として許される。以後政界を退き、トゥスクルムの別荘に引きこもり、弁論術と哲学に関する著述に専念する。ギリシャ語の述語をラテン語に移したのはこの頃である。紀元前46年、妻のテレンティアと離婚する。彼女は、名誉心が強く、家事よりも政治的なことに口をだしたがる女性であった。娘のトゥッアと息子のマルクスを生んだが、母親らしい態度をとらず、またキケロの家の物をなくして多額の借金をつくったりしたからであった。同年末に、キケロが遺産を管理している、45歳も年下の貴族の娘プブリリアと結婚する。資産目当ての結婚だと噂される。彼女の資産でやっと、数万ドラクメーの負債から解放された。しかし彼女は、娘のトゥッリアの死を喜んだので、2、3ヶ月で離婚した。紀元前46年には『ストア派のパラドックス』、『弁論家』、紀元前45年には『アカデミア』、『最高善と最大悪について』、『トゥスクルム論議』、『神々の本質について』、紀元前44年には『老年について、または大カトーについて』、『卜占について』、『宿命について』、『義務について』など次々と完成する。紀元前45年、カエサルが、ナポリのキケロの別荘の客となり、二人は文学についての会話を楽しんだ。紀元前44年、共和制派によりカエサルが暗殺されると、キケロは、共和制復興のため、政界に戻る。紀元前43年、アントニウスとオクタヴィアヌスとレピドゥスの第二次三頭政治が成立すると、キケロは、ローマの共和制と自由を守ろうとして、アントニウスの暴政を弾劾する演説『ピリッピカ』を前後14回にわたっておこなった。しかし逆にアントニウスから、処罰者名簿の筆頭にあげられる。12月7日別荘のアスッラで、アントニウスの手の者に暗殺された。キケロの首と右手は切り離され、フォオ・ローマノの演台に釘付けにされた。

キケロの人物は、いろいろいわれている。辛辣な批判も多い。紹介しておこう。カエサルの恩義を受け、彼にへつらいながら、他方では裏をかくような卑劣な人間であった。若いオクタヴィアヌスにへつらいながら味方にしようとしたが、裏切られるような愚昧な人間であった。博覧強記だけによって書かれたかれの書物は辻褄が合っていない。不動産などの財産運営に熱心で、わずかの間に財産をつくり、ローマの大資産家になった。貪欲で、家庭では打算的な夫であり、冷淡な父であった。長年連れ添った妻を、借金返済のために、そして金持ちの若い娘に気を引かれて離婚した冷酷な夫である。追放中に破壊された本宅の国家賠償額が200万セステルティウス、

トゥスクランの別荘の賠償額が50万セステルティウス、フォルミアンの別荘の賠償額25万セステルティウスしかもらえないので、国家は吝嗇だと嘆き悲しんだほど貪欲であった<sup>(5)</sup>。政治家としても内容の伴わない空論家であり、大洞吹きのパテン師で、そのくせ臆病者であり、逆境に弱く、すぐ泣き言を並べる。また政治家として洞見も先見もなく、変節、短見のエゴイストである。読書しては素早く一作をものにする独自性のないジャーナリストにすぎない。困難を避け、安きに勇奮する卑小卑劣の徒だとする評もある。確かに歴史は、あれほどの熱弁を振るったキケロの共和制擁護論が時代認識を誤ったものであることを証明している。また、彼の弁論には、悪しき意味でのソフィスト的傾向も見られ、人を傷つけたり、反感を買ったこともあった。弁論において、嘲笑や冗談をいやになるほど使い笑わせたり、辛辣に非難したので、相手から激しい憎しみを買ったり、意地悪だという評判をえたことも多かった。彼は、このように人を信服させるような有徳の人ではなかったようである。例えば、キケロを殺したのは、かつてキケロが弁護したポピリウであり、隠れているキケロの場所を教えたのは、キケロから学問を習ったピロロクであった。彼の雄弁も、推敲に推敲を重ねた上での雄弁であった。彼に弁護を頼み、敗訴した人が、出版された推敲ずみのキケロの弁論を読み、「このように弁護されていたら勝利したろうに」と、嘆いたという話もある。またキケロは衆に抜きんじて権力欲と名誉心が強かった。自分の業績や行動ばかりでなく、自分が述べたり書いたりしたことまでほめあげるの、卑賤な人として嫌われた、ともいわれている。とくにカティリナ事件のときの活躍を繰り返し繰り返し自画自賛するので、人々は飽き飽きし、むしろ反感を抱くものが多くでたほどである<sup>(6)</sup>。

ただし、民衆の憎しみを買ったのは、彼の邪悪な行為ではなく、絶えず自分のことをほめる大言壮語にすぎない。さらにアウグスティヌス(354年～430年)のように、ローマの偉大と繁栄の原因として名誉欲と称賛欲をあげ、キケロにとり、名誉欲も称賛欲も徳の発現であり、道徳的エネルギーの源なのであるから、キケロの名誉欲を非難するべきでない、と弁護する者もある<sup>(7)</sup>。自分の行為に対して正当な評価がなされ、それが歴史に記録されることは不死の栄光に値するものである、という考えはローマ時代にとくに強かったのである。また、名門の出身でなく、財産も、軍事的力もない新参者のキケロにとって、ローマで成功者となるためには、ステイタス・シンボルを飾り立て、常に自画自賛せねばならなかったのである。その賛美は、キケロにとり公平であり公正でもあった。しかもキケロには、他人への嫉妬心はなく、自分に賛成する人にも反対する人にも賛辞を惜しまなかった。キケロの愛娘トゥッアの夫ガイウス・アントニウスは、妻の持参金を使い果たすや、放蕩はやめないやで、憎んでも当然の婿であったが、キケロとの関係は良好であった。ただしキケロの名誉欲には行き過ぎの傾向がみられることは否定できない。キケロの雄弁家、名文家の評判は友人のアッティクスのおかげでもある。当時、アッティクスは、キケロの演説や論文の写本作成をおこない、それを企業化していた。そのおかげでキケロの写本

は各地の国立図書館をはじめとして広く読まれていたし、現在にまで伝わっているのである。また、キケロ自身自慢するように、ギリシア哲学の深遠な思想を、哲学的思索の苦手なローマ人の考えに巧みに合わせ、これを適切、優雅にラテン語を持って表現していることは、大いに評価される場所である。表象 (*φαντασία* ファンタシアーを *visum* ウィースム), 判断中止 (*ἐποχή* エポケーを *assensionis relentio* アッセンシオーニス・レレンティオー), 知覚による判断 (*συνκατάθεσις* スュンカタテシスを *assensionis atque apprbatio* アッセンティオー・アトクェ・アップロバーティオー), 原子 (*ἄτομος* アトモスを *individuum* インディーウィトゥウム), 空虚 (*κευός* ケノスを *vacuum* ワクウム) などの多くのものを翻訳した。初期キリスト教の教父達や中世の学者達が、ギリシア哲学を学ぶことができたのはキケロの作品を通じてである。キケロの豊満で力強いラテン語そのものも、現在でも完全なラテン語の典型として評価されている。ローマ最高の学識者としての評価も高い。また彼の弁論は、今でも裁判の弁論のモデルとなるほどである。随所にユーモアを挟み、適所で聴衆の泣き所をおさえ、学識豊かな引用を駆使して感嘆させたうえで、結論に持っていく名弁論とされている。彼は、ステイタス・シンボルとしての邸宅や物財は借金をしてまで購入したが、一般的に物財に対する軽蔑の念は強かった。弁論の報酬や贈り物を受け取らず、当時当たり前のことであった賄賂は拒否する清廉潔白な人物であった、といわれている。ナポリとポンペイトのそばに、わずかの収益をあげる農場を持ち、それと妻の資産を合わせて質素な生活を送り、ギリシアやローマの文人と歓談することを好んでいた。若い頃から胃の加減が悪かったせいもあり、日暮れ前から食事についてはまれであった。このようにキケロの人物は高くは評価できない部分が多いが、彼の学識は大いに評価すべきものである。

- (1) キケロの自伝は、『プルターク英雄伝』を主に参照した。河野与一訳、プルターク英雄伝、岩波文庫(10)、161頁~232頁。H. Taylor, *Cicero, A Sketch of his Life and Works*, London, 1916.
- (2) 参照、弓削達、生活の世界歴史4、素顔のローマ人、107頁~108頁。ローマでは弁護料は無報酬と決まっていた。しかしローマの風習として、遺産相続人に、近親者はかりてなく友人知己を加えるのが一般的であったから、キケロは、弁護をした人々の遺産相続人に名を連ね、金持ちになったのである。
- (3) 例えば、紀元前58年12月29日のアティクスへの手紙を参照せよ。Cicero, *Letters to Atticus*, Books 1-6, with an english translation by E. O. Winstedt, M. A. of Magdalen College, Oxford, Harvard University Press, 1980, pp.246-253.
- (4) ト占官アウクルとは、定員3人から次第に増大して16人になった鳥占いの官吏で、鱸の餌の食べ方や鳥や鳴き声や飛び方をみて予言するのではなく、単にことの吉凶を占うだけの任務であった。小クラッススかパルティアで死んだ後、彼に代わって就任したといわれている。キケロは、『法律について』の中で、「最高命令権と最高支配権によって召集された民会や議会を解散させたり、すでに開催されている場合にはそれを無効にしたりすることかできる特権ほど、大きな特権はあるだろうか」

として、卜占官の特権が最大最高の特権であると、自画自賛している。中村善也訳、法律について、世界の名著 13, 179 頁。もちろん宗教界の最高権威者は、終身任期の最高神祇官ポンティファクス・マクシムス一人だけである。

(5) cf. Cicero, *op. cit.*, p.271.

(6) 参照, キケロ, 角男一郎訳, 義務について, 41 頁～42 頁。

(7) 参照, アウグスティヌス, 服部英次郎訳, 神の国, 岩波文庫 (1), 387 頁～392 頁。

本稿のおわりに、古代ローマの歴史とキケロの自伝を、浪費を中心としてまとめておこう。

紀元前 6 世紀におこった古代ローマは、紀元 509 年に共和制となり、開放性と質実剛健な気風で、イタリア半島を統一し、紀元前 264 年から紀元前 146 年のポエニ戦争で、地中海の覇者の地位を獲得する。紀元前 2 世紀頃から帝国主義的性格を強めていったローマは、先進国ギリシアや小アジアのような外国から、目も眩むような富を収奪し、さらに贅沢品を流入させることで、市場が拡大し、高度成長の波に乗り、豊かな生活を実現させていった。しかしカルタゴのような強敵がいなくなると、弛緩し、放蕩の生活におぼれ、怠惰と贅沢が支配するようになった。それと同時にローマ国内でも、大土地所有者である金持ちが、中小土地所有者を搾取し、富を独占していった。その結果、少数の金持ちはますます金持ちになり、政治を独占するようになり、他方、多数の貧者はますます貧しくなり、プロレタリアートとなっていった。その金持ちが、貧者の目の前で贅沢で浪費的宴会などの豪華な生活を繰り広げ、大衆の不満が高まると、「パンとサーカス」という一時的享楽と贅沢で不満をかわそうとした。ローマは、金持ちが貧者をも巻き込んだ形で、墮落的浪費の生活にのめり込んでいったのである。この傾向が強まっていく時期である紀元前 106 年、キケロは騎士階級の家で生まれた。彼は、今までのギリシア哲学とローマ哲学の思想を折衷し、とくに公人達は、浪費的生活から抜け出て、ストア的な自然にかなった、贅沢でも貧しくもない中庸の生活を送ることにより、道徳性を回復し、危機に瀕しているローマ共和制を再興するべきとする熱弁をふるったのである。しかし彼の熱弁は、しばしば自慢と詭弁に彩られ、聴衆の顰蹙を買うことになった。紀元前 43 年、キケロは政敵に暗殺される。彼の死後、ローマは帝政の時代を迎え、浪費と贅沢は限度を知らないほど広く、深く行き渡り、人々は墮落、腐敗していくのである。それが 476 年の西ローマ帝国の滅亡の原因の一つとなったのである。

## 《Summary》

## History of the Theory on Consumption and Luxury (2)

*By Akira FUKISHIMA*

By the 2nd century B. C., the Romans had built an affluent society and their attitude of making much of valour and plain life had changed into that of making much of luxury. In the 1st century B. C., Cicero made a scheme of the Roman philosophy, making an eclectic of various Greek philosophers' thought. In his works, he emphasized the importance of a natural, moderate life. In this article, I investigate the history of the ancient Roman society and the autobiography of Cicero in the light of luxuries.